

# 船場大学の取組みとキャリアデザイン

## Report about "Semba University" (Informal Body of University Students and Office Workers in Osaka) and Career Design.

向 井 光太郎

MUKAI Kotaro

本報告は、2011年度に実施または計画予定の大阪市都心での大学生および若手社会人の学習機会について紹介するものである。大阪市都心のオフィス街に主要大学がキャンパスを構えていない状況は、東京や京都と比較して文化の担い手である若い大学生世代が都心に多く在学しない大阪の地域活性化面と文化発展面でのディスアドバンテージである。大学生など若い世代が都心に滞在し学び遊ぶ地域になることを目指して、シリーズ開講する「船場大学」を通して学びの場の新たな型を実践することで、そこから生まれる学習機会と教育形式の新たな枠組みを提言する。また、この教育活動「船場大学」を一つの街に見立てた場合、この街を構成する人や街自体によるキャリアデザインへの貢献について示唆すると共に、所属の大学や所属企業などの枠組みを超えた集まりが、知識活性化の発展にも寄与する可能性を検証するものである。

キーワード：ビジネス、大学、コミュニティ、地域活性化、キャリアデザイン

Key Words: Business, University, Community, Regional revitalization, Career design

### 1. はじめに

船場大学とは、筆者が主宰・企画・運営しているもので、大阪市中央区の本町・船場エリアを拠点にした学習の場の名称であり、文部科学省に設置認可された研究教育機関としての大学ではない。この船場大学は、特定の物理的キャンパス施設は保有しておらず、大学生や若手社会人を中心にした少人数制の学習機会として、毎回テーマを設定して半定期的に開講している。毎回の講義は約2時間程度で、受講料や入学金などの費用負担は生じない。

開講場所については、心齋橋キャンパスを大阪市中央区の「アップルストア心齋橋<sup>注1</sup>」に、淀屋橋キャンパスを同じく大阪市中央区の「アイ・スポット<sup>注2</sup>」に各々設定して、無料使用できるよう調整している。毎回の講義構成は、テーマに関する講義を筆者がコーディネ

イトすることによって依頼した講師が担当し、その講義に関する質疑応答やディスカッションを講義後に行う2構成が中心だが、テーマ内容によってメイン講義が複数構成になる場合もある。キャッシュフローを生じさせない理由は、受講者を"消費者"と認識しないことにある。本取組みは、教育サービスを提供することが目的ではないので、ビジネス化する必要はない。無料受講することにより、各講義を気軽に受講できるだけでなく、自らを"受益者"と認識しないことで、関心や興味に基づく素直な学び、つまり"本来の勉強や学習のあり方"を体感してもらいたいと考えている。また、講師や運営サイドも、本能や使命感で教育や学習の場をどこまで提供できるのか、「学びの場」のありべき姿を見出したい狙いを共有している。

この船場大学を開講するに至った最大の理由は、大

阪都心の船場・中之島エリアに大学生を滞在させ学びの場を創出したいことにある。昨今の就職活動の長期化により、複数学年にまたがる就職活動従事学生が、採用の本格化する時期にこのエリアに期間限定として多く滞在する事は確認できるが、これは採用試験を受ける企業への訪問やそのための移動をしているのであり、滞在人数も大手企業の採用スケジュールや採用プロセスの変遷によって変動するだけでなく、多くの企業が採用終盤のプロセスを東京で実施していることにより、同時期以降はこのエリアで学生を見かける機会も目立って減少する。つまり、就職活動以外の目的で同エリアに大学生が滞在することは極めて少ないのである。また、大阪の梅田や北浜および天満橋エリアを都心にキャンパスを構える一部の大学も、そのほとんどはサテライトキャンパスやオフィス機能を中心にしたもので、来学の大半は社会人で占められていることなどから、現役大学生が所属大学への通学や余暇のために移動や滞在を行っているものではないことは容易に推察できる。そのため、少人数でもこの船場大学を複数開講することにより、大学生や帰宅途中の若手社会人や中堅社会人が同じ場で学習する機会を創出してグループ形成が出来れば、ネットワーク化や拡大化に発展することも期待できる。では、以下に2011年度に開講した(2012年1月24日現在)講義を紹介する。

## 2. 取組内容

### (1) 第1回 船場大学心齋橋キャンパス「私たちの授業、教室、大学環境を考える」

2011年5月30日(月)18:30~20:30に、大阪市中央区内で実施した。この講義は、iPhoneやiPadを活用できる大学での授業のあり方や大学環境を考える講義で、ソフトバンクテレコム株式会社の協力により、ソフトバンクモバイル株式会社エバンジェリスト中山五輪男氏による文教施設や企業でのiPhoneやiPadの導入活用事例などについて、TV番組での事例紹介なども取り入れた視覚的に説得力のある事例研究型の講義を実施した。位置情報を備えた出欠管理システム、動画での講義内容配信、twitterを活用したスライド説明や質問システム、通訳機能を応用した聴覚障がい者や外国人観光客のサポート事例など、すでに運用され

ているケーススタディを実施した。

続いて、学生代表(関西学院大学経済学部4年生)より大学生による大学、高校などへの講義紹介、参加者との質疑応答などを行った。これらのマシンの活用や有用性について、学生の語学能力の低下に発展する危惧、ITやインターネット依存の回避など、今後の課題についても議論する機会になった。また、学生と大学のワークショップ、企業や機関との連携にフィードバックできる学習機会となった。なお、本企画は、「アップルストア心齋橋」が運営する「カレッジナイト<sup>注3</sup>」を活用し実施したものである。

参加人数:26名 現役学生7名(うち本学学生2名)、大学関係者5名(奈良佐保短期大学3名他)、一般社会人7名、協力企業6名(ソフトバンクモバイル&テレコム)および進行1名(奈良佐保短期大学 向井)

### (2) 第2回 船場大学淀屋橋キャンパス「食を楽しむ、学ぶ」

2011年6月29日(水)19:00~21:00に大阪市中央区内で実施した。この講義では、関西学院大学・神戸女学院大学・武庫川女子大学の女子メンバーで構成されるパン作りを主な活動とする学生サークル「Sammy Pan」によるパン作りやパンショップめぐりなど、フィールドワークを中心にした活動報告を行った。

続いて、農林水産省近畿農政局中尾卓嗣氏による食育講義として、主食の変遷や栄養摂取に関する統計デー

写真1 中山氏による講義



タを基に日本の食糧消費事情や現象について事例紹介があり、食を作り食べる事と家族の絆や人間の触れ合いなどの大切さを、いろいろな事情を抱える家族についての事例紹介を行いながら説明するなど、「食」を通して多様な知識を獲得する講義となった。

パンや料理を作ったり食べたりすること以外に、参加者の食に対する視野や意識の幅を広げる機会としてこの講義を位置付けた。パンを主食にすることが難しい原料の生産状況や、白米を朝食にする習慣の工夫や米粉を原料にしたパン試作などについても意見交換があり、引き続き、議論を続ける事が有意義な機会との認識で参加者のコンセンサスを得て、本テーマ講義をシリーズ開催することになった。

参加人数32名：現役大学生13名，社会人13名（20代6名，30代3名，40代以上4名），一般参加者2名，大学教員2名（奈良佐保短期大学）および講師1名（農林水産省近畿農政局），進行1名（奈良佐保短期大学 向井）

### (3) 第3回 船場大学淀屋橋キャンパス「食を楽しむ & 学ぶ2」

2011年9月28日（水）19:00～21:00に大阪市中央区内で実施した。食べることをライフスタイルの中で楽

しみ学ぶ大学生の皆さんが集まり、食べることから自分たちの楽しみや、周囲・地域・日本・世界に広げられるかもしれない活動や行動の可能性を学び合った。前回に引き続き、関西学院大学・神戸女学院大学・武庫川女子大学の女子メンバーで構成されるパン作りを主な活動とする学生サークル「SammyPan」により、米粉を原料に使った米粉パンの試作活動などについての取組み紹介や、関西近郊のパンショップ散策の紹介などを行った。前回の船場大学講義を通して関係が深まった農林水産省近畿農政局大阪地域センターから米粉担当者を紹介してもらい、新たな活動として米粉パン試作に発展したことは、学生の活動の幅が広がることに船場大学が寄与した事例になった。

つづいて、三洋電機株式会社マーケティング本部古長亮二氏により、同社ヒット商品のGOPAN（ゴパン）誕生のストーリーや製品説明ならびにGOPANを通じた食育や地域貢献などの活動やプロモーションについて講義を実施した。

参加人数33名：現役大学生8名，社会人15名（20代8名，30代3名，40代4名），一般参加者3名，大学教員2名（奈良佐保短期大学），企業協力2名（三洋電機），ゲスト1名（農林水産省近畿農政局），講師1名（三洋電機），進行1名（奈良佐保短期大学 向井）

写真2 中尾氏による講義



写真3 SammyPanによる活動報告





写真4 古長氏による講義



写真5 小島氏による講義



(4) 第4回 船場大学淀屋橋キャンパス「法律を楽しむ、学ぶ」

2011年11月24日(木) 19:00~21:00に大阪市中央区内で実施した。法学や法律を専攻外にする大学生や周辺の企業で働く若手社会人が集まり、「知的財産」をメインテーマにして、「実生活で縁の遠かった」法律や法学を、実社会の例やケースを通して身近に学び合う機会となった。小島法律事務所弁護士小島幸保氏による座学中心の講義形式で、自身のプロフィール紹介に続き、産業財産権と著作権の解釈や、法律の解釈や保護の必要性説明に続き、産業財産権としての特許権、実用新案権、商標権、意匠権、不正競争防止法などについての個別説明や事例紹介などを行った。

法律、法学、知的財産などに「これから新たに」興味を持つことで、社会と関わる自分の向学意識を高める機会になり、社会に進出した若手社会人も「これからでも」仕事に生かす自己啓発の選択肢を増やす機会となり、自己啓発マインド喚起型の学習機会となった。

参加人数21名：現役大学生1名、現役大学院生1名、社会人17名(20代6名、30代8名、40代3名)、講師1名、進行1名(奈良佐保短期大学 向井)

(5) 第5回 船場大学淀屋橋キャンパス「プロダクトからコミュニティをデザインする」

2011年12月7日(水) 19:00~21:00に大阪市中央区内で実施した。ケブラデザインスタジオ代表大倉清教氏が提唱する『日本の伝統産品は「おもてなし」の文化を次の世代に受け継ぐ大切な媒体であり、それに気づき守らなければならない。そしておもてなしをするにはホンモノでなければならない。』との考え方をベースにして、製品や意匠やスペースのデザインから「人をつなぐ、街をむすぶ」可能性について事例を交えて説明を行った。

講師からは、公共空間やオフィス空間のスペースデザインやインテリアデザインのご紹介に始まり、鉄道のホームベンチをはじめとする単体の工業製品などのデザイン事例ご紹介を経て、地元産品を使ったインテリア事例や複数地域の地元産品を組み合わせた新しい工業製品などについていろいろな事例を学ぶ機会となった。立場によってデザインをする重要性、ユーザーの立場になってデザインすること、感受性と感性には精神的要素「熱意」「持久力」などであること、産地やその産地の良いものをしっかり勉強し、「知ること」の大切さなどについて説明を受けた。また、街づくりや地域活性について「地元産品」同志やそれらに関わる人をつなぐ立場も「デザイナー」機能であるなど、参加者各々自身もデザイナーとしての潜在力やチャンスを持っている事を意識することが出来た。

参加者からは、「面白かった」「展示会で一緒にだっ

た」「僕にもデザインのチャンスがありそう」「いろいろな場所に出かけてみよう」「楽しかった」などのフィードバックがあった。

「街づくり」「地域活性化」を、その地域に根差した製品や材料を通じて実現する可能性を学び合う機会になったこの講義は、身近なアクションがデザインにつながることを講師の様々な事例を通じて体感し、各参加者が潜在的デザイナーであることを意識することにも貢献した。また、地元産品の新しいカタチを現地で学ぶ「学外授業」の開講についても提案がなされ、講義形式の広がりを通じて参加者の人的つながりやネットワーク発展も期待できる新たなアプローチを組み入れるヒントを見出す機会になった。

参加人数14名 現役大学生1名、一般社会人11名(20代5名、30代5名、40代1名)、講師1名、進行1名(奈良佐保短期大学 向井)

#### (6) 第6回 船場大学淀屋橋キャンパス「パンとスイーツから考える地域の魅力」

2011年12月20日(火) 19:00~21:00に大阪市中央区内で実施した。これまでの船場大学の中で「食」をテーマにしているシリーズでは、「食品」から「食育・職業自給率」に話題が発展し、日本の主食である白米を原料とする「米粉」をきっかけにして、課題がグローバルな方向に進んできた。

そのため、今回は「ローカル」にフォーカスした講義とし、講義内容の企画、講義の進行・運営全般を、

写真6 大倉氏とのディスカッション



これまでの船場大学への参加してきた社会人1年目メンバーと学生サークルが担当する新たなアプローチを導入した。これは、船場大学が目指す「教育機能の発展」事例にもなるシリーズと位置付けた。関西の神戸・阪神間にはパンショップやスイーツ店が集積している現状より、この地域に店が多い要因や店舗自体の特徴、消費者の動向などについて、進行を務める学生サークルによるフィールドワークを通じて検証し、パンショップやスイーツ店がエリアや街を発展させる可能性について学び合う機会作りを狙いにした。また、本町船場エリアの老舗店主による講義、店から発展する街づくりや地域活性化についての意見交換も行う事とした。

当日は、南山達資氏(大学職員)と関西学院大学など学生サークル「SammyPan」代表山本優花氏、副代表榎元麻衣氏による苦楽園や芦屋のパンショップやスイーツ店でのインタビューなどフィールドワーク、パン・スイーツ店情報紹介サイト運営者との面談についての報告があり、神戸や西宮周辺のパン・スイーツ店の普及には、単独店間によるものだけではなく同業店の人気メニューパンや名物スイーツ商品を単独購入するなど、自家用車での移動が中心で、朝食を中心にしたパン食中心のライフスタイルが大きな要因として作用しているとの見解を示した。

次に「SammyPan」活動報告では、11月の大学祭模擬店の様子として、12万円強のオリジナルフレンチトースト売上の全利益約6万円を東北震災支援のために関西学院大学を通じて寄付した事などが紹介された。また、同大学生協とのコラボレーションでオリジナルパン開発プロジェクトを進めていることについて報告があった。これも、船場大学での学習機会での助言から発展した動きでもある。

最後に、ゲスト講師「平岡珈琲店」店主小川清氏による講義では、周辺地域のパン屋事情の変遷やコーヒー普及および「平岡珈琲店」の沿革、利益を生み出す難しさ、同店名物製品「ドーナツ」のレシピ資料紹介、委託販売についてのエピソード、大阪の街の賑わいと飲食店の関係性などについても示唆があり、個人事業とチェーン店との比較、スターバックス誕生と急成長などをその示唆の事例として用いて、大阪市都心の地域活性化や街づくりにおける課題の議論へと発展した。

大阪市都心のパン・スイーツ類の小売店については、「大型チェーン」「コンビニ」「新業態」などのオフィスワーカー向けの生活スタイルにユースに合わせた店舗業態を多く採用しており、同様店舗の開店閉店の繰り返しになってしまう展開への危惧が指摘された。小川氏からは、「同じものがどこでも手に入るこれらの業態では、街の個性を反映する店舗展開は期待出来ない。」「都心で経営効率や収益を重視する店舗立地を許してしまえば、店が名物化したり、単独メニュー目当てに人が集まることは期待出来ない。」「これから店舗を開店希望している経営者は、都心の外側隣接エリア（たとえば、玉造、四天王寺、福島など）に進出するだろう。」といった持論の展開がなされた。参加者からは、「都心は名店や名メニュー存在の空洞化が進み、生活感や個性の無いエリア化が進む可能性がある。」「消費者感覚のリスクとして、店を"欲しい商品を購入、入手する場"としてしか認識しない傾向が進む」などの意見があり、「店の機能や構成要素は、モノやサービスを提供するだけではない"交流や日常を感じる場"としての空間認識である」との見解を共有した。

参加人数：24名 大学生6名，大学院生2名，社会人9名（20代3名，30代3名，40代3名），一般参加者5名，講師1名，進行1名（奈良佐保短期大学 向井）

写真7 南山氏とSammyPanによるフィールドワーク報告



写真8 SammyPanによる活動報告



#### (7) 第7回 船場大学淀屋橋キャンパス「被写体から学ぶ街と人」

2012年1月24日（火）19:00～21:00に大阪府中央区内で実施した。船場平野町でカメラスタジオを経営するスタジオコニシ小西國広氏によるこの講義は、大阪都心船場エリアを拠点に「カメラ」を通して大阪の街、風景、人、家族など、たくさんの姿や表情を見つめ接してきたプロフェッショナルから、「街の被写体」を通して、街での過ごし方、風景や景色の楽しみ方、街の歩き方など「街の楽しみ方」について学び合う機会である。また、大阪都心の街で「過ごす」「暮らす」「歩く」人 私たち一人ひとりの生き方、日々の過ごし方についても考え合い、講義の後には、講師と参加者全員で「街のあり方」「街での生き方」について議論し合い、街を構成する人間の感覚や意識の大切さをこの講義により再認識した。

講義では、徳島県出身の本人が立木香都子<sup>註4</sup>氏に師事しているときから「街、暮らし、文化を理解して、人、家族、社会の集まりを写すこと、そのために勉強すること」の大切さを教わり、文化や芸術が集まる大阪のロイヤルホテル（現リーガロイヤルホテル）に就職されたエピソードに始まり、大阪に来られてすぐさま足を運ばれた場所（旧大阪大学医学部、大阪城、土



佐稲荷神社、四天王寺、川口周辺、適塾、鞆公園周辺、北御堂、南御堂など）が紹介された。

次に、大きなカメラで写真に人を収める時には相手の気持ちと調和する事が大切で、同じ場においても違和感を感じられない入り込みが重要であること。また、パーティーなどスナップでは、周りの人との人間関係を理解することがポイントで、常に文化や人の考え方を理解するように向き合ってきたことなど、写真撮影を職業としない一般市民にも必要な心構えであることを教えられた。また、ホテルにこられる政財界の要人、著名人、文化人との出会いや仕事も多く、それらの方々との撮影エピソードについても紹介された。

2000年前後になると、得意顧客の出入りが減少傾向にあり、写真のデジタル化にカメラやフィルムもハード&ソフト面でシフトを余儀なくされる環境の影響もあって、現在の地で独立起業して平野町のスタジオでファイナダー越しにいろいろな人や風景と触れ合うことになる。「元気に」写真をお渡しして元気になってもらう姿勢で顧客と向き合う本人は、顧客自身の信念やイメージが足かせになって、良い写真を撮れない事もあり、意見を聞かずに拒否反応を示されることも多々あるが、できるかぎり「これがあなたの良い部分」を伝えて理解してもらえよう努めていることを説明された。常に顧客の「音」と「色」をイメージしてシャッターを切る姿勢を大切にしている。

最後に、これまでの経験を通じて「ダメなものは淘汰、排除されるのだろうか。大切にしておく必要もある」「努力すればOK!でもない。努力していないからダメ!でもない」「計算通りいかになくても良いことはたくさんある」などのメッセージをいただき、受講者の日々の生き方、人や景色との向き合い方を改めて考える機会となった。

参加人数：21名 大学院生2名、社会人10名（30代4名、40代6名）、一般参加者7名、講師1名、進行1名（奈良佐保短期大学 向井）

## 2. 船場大学とキャリアデザイン

この船場大学は、毎回のテーマを都度検討して講師の調整を行った上で内容を設定し、講義を企画・運営している。これは昨今、狙いやゴールイメージを重視

して計画的にプロジェクトを推進するアプローチと真逆のアプローチを導入する"自然発生的"開講形式である。このことにより、参加者に対して「偶然性」や「直感」による行動力の大切さをプログラムや運営方式を通して伝えている。

昨今のキャリア教育や学校教育の中では、「社会が求める」「企業が期待する」など、実社会が必要とする能力を育むための科目やプログラムが積極的に企画・運営・実施されている。しかし、これからの世の中を生きる社会人がすでに数々の「想定外」インシデントを経験し、生命や企業経営を脅かす状況下に置かれる中では、これから生き抜く新たな視点やアイデアを生み出す能力を育み、その方法を見出すためには、論理的な思考だけではない感覚的なセンスや嗅覚も重要になってくるはずだ。そのため、開講までのプロセスや経緯についても、できるかぎり運営サイドと講師との講義内でのコミュニケーションで説明または紹介できるようにし、参加者が身近に「偶然」や「自然発生」の重要性を感じ、自らの生活の中で自らの能力を多彩な方法で高められるようなきっかけづくりを心がけている。

参加大学生や大学院生に対しては、プログラム内容や講師の人格面を通じて自らの大学生活のあり方（学業、一般生活、進路設定）を自然に考える場としてこの「船場大学」を捉えており、同じく「船場大学」に参加する若手社会人との交流により、お互いのキャリアデザインを行う機会になることも期待している。現に、淀屋橋キャンパスの講師として登壇した「SammyPan」は、初回に同じく登壇した中尾卓嗣氏との講義打合せや面会機会の中で、米粉担当職員とのリレーショを構築することになり、「米粉パン」試作や同じく船場大学での「米粉パン」試作品配布に発展するなど、「活動の幅」を広げ、各メンバーのいろいろな能力を高めることに大きく貢献していると言える。また、参加者の中でパンとワインを販売する専門店を経営する社会人からでパン作りの技術指導を受けるなど、スピード感のある行動力や交渉力を養いながら専門的なスキルを向上するような取組みを行っている。更に、所属大学生協との共同開発によるオリジナルパンの製作に至っては、そのアクションのきっかけになった船

場大学でのコミュニケーションが発端となり、開発に関わる際に発揮する能力や知識は、この船場大学でも一部培われたことが活かされていると考えられる。

これらの機会は、将来の進路や働き方に必要な能力を向上することが出来る点で、素朴なキャリアデザインの間として認識できる。キャリアデザインは、プログラムや科目によって取り組ませる傾向が目立っているが、大学外においても個人を高める人的な接触活動が可能で、同じような目的や意識を持つ年齢や性別を超えた周囲との共存環境の中でも行えることから、何らかのテーマについての企画や運営などに参画可能な場としての空間づくりを行う事が運営側に求められる重要かつ不可欠なアプローチである。

### 3. おわりに：船場大学の今後の展開

教育機能は、年齢や職制を問わずに人間に備わっている本能である。つまり、誰にでも教育を施すチャンスや機会がある。高い倫理性や道徳観を備えた大学生を中心にした参加者が、ゴールや狙いにこだわって街で学び集うのではなく、偶然や思いつきでも有意義な学習機会を企画・運営できるように、運営主体者は「社会との接点やコネクション」の拡大を推進し、集客数や開講回数を経済ベースで管理するのではなく、講義内容や使用可能な施設に見合った規模で続けていくことを心がけたい。スタート時点のコンセプトでもある「お金を払わない、もらわない、使わない」スタンスを踏襲し、規模の拡大性は追及せずユニークで有意義な講義を開講することを通じて、参加者各人の日常の何らかの文化的な活動が「船場大学」をきっかけにして、発展していくことになれば、この活動の存在意義は更に高まると考える。

\*iPhone, iPadは、Apple Inc.の商標です

#### 注釈

注1) Apple Store 心齋橋：「Topページ」

<http://www.apple.com/jp/retail/shinsaibashi/>  
(2011.11.30)

注2) 大阪市：「アイ・スポット（まちづくりの情報発信施設）」

<http://www.city.osaka.lg.jp/keikakuchosei/page/0000018184.html> (2011.11.30)

注3) Apple Store Shinsaibashi：「カレッジナイト」  
<http://www.apple.com/jp/retail/collegenight/>  
(2011.11.30)

注4) 立木写真館：「Topページ」<http://www.tatsuki-photo.co.jp/> (2011.11.30)